



不安定な海中で行われるサンゴの移植風景



海水と同じ状態に管理された水槽で養殖されるサンゴ



「人間力大賞」でこれまでの活動や苦勞が初めて認められた

で養殖サンゴの移植がスタートしました。移植はまず、岩盤に水中ドリルで穴を開け、小さなサンゴが植えられたT字ピンを穴に差し込みます。穴に砂を流し込み、ヘチマスポンジでフタをしたら完了。保護動物であるサンゴの移植には県の許可も必要で、移植の方法はもちろん、どの岩盤が最適か、どんな水流や水温が適しているかなどは前例がなくすべてが手探り。多くの失敗や検証からデータを蓄積してきました。

「自然な海の状態や生態系を再現するため、数種類を混ぜて移植しますが、育て方が異なる六十〜七十種のサンゴを常に養殖するのは大変」。沖縄の土でできた陶器製のT字ピンを使うのも、生態系への影響を考えたことです。

「これまで一番うれしかったことは、移植したサンゴが初めて産卵したとき。海の神様に感謝しましたね」と話す金城さん。この活動が今年七月、青年版国民栄誉賞ともいえる「人間力大賞」グランプリを県内では初めて受賞しました。内閣総理大臣奨励賞、環境大臣奨励賞も同時に受賞し、「評価を受けたことで多くの人に沖縄のサンゴの大切さを理解してもらえようになった」と喜びます。

記念日などに誰でもサンゴが植えられ、植えた人には「海からの感謝状」が届く取り組みも考案し、これまでに植えられたサンゴは約三千本。植えられたサンゴをホームページ上で確認

することもできます。「沖縄のサンゴは急速な勢いでなくなっています。手遅れになる前に地元の間が沖縄の魅力、財産に早く気がつき、できることから始めるべきです」。今後は、サンゴの移植に名乗りを上げる市町村へのサポートや、企業とのタイアップなどで環境保護を事業として継続することを考えています。

サンゴの移植がなかなか軌道に乗らず悩んでいたとき、勇気をくれたのは家族の応援でした。自称「サンゴの移植屋」さんは、三人の子供たちと交わした約束通り、沖縄の海を再びサンゴでいっぱいにするために奮闘しています。

●海の種類 <http://www.ppmokinawa.com/> 0120-28-1135



「海からの感謝状」



養殖された小さなサンゴを手にする金城さん

色とりどりのサンゴが息づく青い海は、ずっと守り続けたい沖縄の財産です。しかし近年、沖縄の海は、赤土流出や地球温暖化による海水温の上昇、環境汚染などが進み、サンゴの白化や死滅が増え、その美しい姿を変えつつあります。サンゴを養殖し、沖縄の海へ移植するという全国でも初の試みに挑戦し続ける金城浩二さんにお話を伺いました。

有限会社 海の種類  
代表取締役 金城 浩二 さん

1970年、沖縄市宮里出身。1998年より独学でサンゴの養殖と移植を始め、2002年、養殖サンゴの移植を本格的に開始。2004年、サンゴの養殖・移植を行う有限会社「海の種類」を設立。2006年、NPO法人アクアプラネット理事長に就任。2007年度「人間力大賞」グランプリ受賞。

「小学一年生のときにフアール昆虫記に出会い、熱帯魚や鳥、昆虫の繁殖に夢になりました」と金城さん。幼い頃から自宅近くの野山を駆け回り、泡瀬の海を遊び場にしてきました。

高校卒業後、一九九三年に飲食店の経営をスタート。子供の頃からの夢だった大型水槽を店内に設置し、最初は趣味でサンゴの飼育を始めました。転機が訪れたのは、エルニーニョ現象の影響が沖縄の海にも及んだ一九九八年でした。サンゴの大規模白化で、子供の頃に遊んだ海の風景が一変し、大きな衝撃を受けました。

「悲しかったのは、海に何かあって

「小さなサンゴから枝が増え、それが魚たちのすみ家となる過程には大きな手ごたえと喜びを感じました」と、試行錯誤を重ね、初移植に成功した当時を振り返る金城さん。その後、大好きな海とサンゴのことを一生の仕事にしようと飲食店を人に譲り、有限会社「海の種類」を設立。養殖技術を確立した翌年の平成十四年、北谷町



# 「サンゴ」でつばいの海を 次の世代へ！

愛する町のために、地域の元気のために、一生懸命活動している人がいます。このコーナーではそれを「沖縄のげんき仕掛人」と呼び、ユニークな活動を応援していきます！

**げんき** 沖縄の自然が学ばだつた子供時代。

**げんき** 独自に編み出した、サンゴの養殖と移植の技術

も誰も何もしようもないこと」。誰も動かないなら、自分がサンゴを増やして海へ返していこうと決意し、全くの独学でサンゴの養殖・移植に挑みました。



水槽の中でT字ピンに養殖されているサンゴ

